

目次

はしがき ..... 秋山 虔 ..... 一

研究篇

『うつほ物語』の手紙文 ..... 室城 秀之 ..... 七

——特に、「蔵開」「国譲」の巻について——

枕草子における戯画化の方法——もどかれる後朝——藤本 宗利 ..... 三九

蝙蝠と駒と昼寝の物語 ..... 辛島 正雄 ..... 六七

——散逸『こまの物語』をめぐる断章——

帚木三帖と空蟬の意味——源氏物語の主題——増田 繁夫 ..... 一〇七

いとねぢけたる色好み——薰像とその背景——仁平 道明 ..... 一三五

定家本「源氏物語」の生成過程について ..... 渋谷 栄一 ..... 一五五

——「桐壺」を中心として——

伏見院宮廷の源氏物語——鎌倉末期の享受の様相——……………岩佐美代子……………一九

資料篇

宮内庁書陵部蔵  
後崇光院御筆 『源氏物語注釈 一卷』……………八 畠 正 治……………三三

祖形本浜松中納言物語卷二(零本)の新出……………池 田 利 夫……………三三

——その影印本文に添えて——

研究篇

『うつほ物語』には、数多くの手紙文が描かれている。物語の前半のあて宮求婚譚に見える求婚歌をもそれぞれ手紙の一つと数えるならば、この物語はおびただしい数の手紙文に満ちているのだが、それらは歌が中心で実質的な手紙としての機能は持っていない。それに対して、物語の後半になると、実質的な手紙文が多くなる。本稿では、特に、「蔵開」と「国譲」の巻の手紙を考察したいと思う。その分析に入る前に、手紙文のもつ問題点を、ごくおおざっぱではあるが、整理しておく。

物語の言説は、一般的に、〈地の文〉と〈会話文・手紙文・心内文〉に分けることができよう。<sup>(注1)</sup> 語り手のことばである地の文に対して、〈会話文・手紙文・心内文〉は登場人物のことばであるという共通点を持っている。この〈会話文・手紙文・心内文〉は、さらに、〈会話文・手紙文〉と〈心内文〉に分けられる。〈会話文・手紙文〉と〈心内文〉の違いは、一言で言えば、對他意識の有無、あるいは、伝達性の有無ということにあるだろう。読者である我々にとっては、〈会話文・手紙文〉も〈心内文〉も、同じように登場人物のことばとして読みの対象になるのだが、〈会話文・手紙文〉は、物語の別の登場人物に語られ書かれた言説として開かれているのに対し、〈心内文〉は登場人物の独白として閉じられており、別の登場人物は関与できない。〈会話文・手紙文〉は、そのような共通点を持ちながらも、大きな相違点がある。〈会話文〉と〈手紙文〉の違いは、あたりまえのことだが、音声か文字かということにある。音声で語られた会話文は、特定の相手に対し、その場限りの言説としてあるのに対し、手紙文は、文字で書かれることによって、その当の相手のみならず第三者の目にも晒され、また、永続的に残されることにもなる。<sup>(注2)</sup> また、会話は直接当事者同士で語られるものだが、<sup>(注3)</sup> 手紙の場合はそれを届ける使者が必要であり、手紙による情報と、使者の口による情報との二重性も問題になろう。さらに、手紙文の特徴として、料紙や折枝などの問題も考えられよう。<sup>(注4)</sup> このようなさざまな問題をかかえながら、物語の手紙文は描かれている。